

『アナと雪の女王』における幸福 (誌上シンポジウム
幸福について)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 柊子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009215

『アナと雪の女王』における幸福

Happiness in *Frozen*

田中 柊子

Shuko TANAKA

静岡大学大学院情報学研究科・講師

shuko.tnk@inf.shizuoka.ac.jp

1. ディズニープリンセスの幸福

2013年11月にアメリカ合衆国で公開されたCGアニメ映画『アナと雪の女王』(*Frozen*)は、ディズニーアニメとしては『ライオン・キング』(*The Lion King*, 1994)を抜いて、歴代一位の興行収入を記録する大ヒット作品となった。日本での観客動員数も2000万人を超え、2001年に公開された宮崎駿監督の『千と千尋の神隠し』に並ぶ記録を残した¹。主題歌の「Let it go ～ありのまま～」(*Let it go*)は街のいたるところで繰り返し流され、クリスマス時期のイルミネーションでは映画の世界観をテーマにしたものが目立った²。『アナと雪の女王』はなぜこれだけ話題となり、多くの観客の心を強くひきつけたのだろうか。この問いに対して音楽、映像、キャラクターデザイン、宣伝方法など様々な観点からのアプローチが可能だと考えられるが、シンポジウムのテーマである「幸福」を手掛かりとするのも有効な手段の一つである。というのも『アナと雪の女王』の物語もまた「幸福」をテーマとしていて、とりわけ幸福を阻むジレンマが丁寧に描かれている点が多くの人々の共感と呼んだと思われるからだ。2014年に話題となったこの作品を取り上げることで、シンポジウムを聴講した学生の世代も含め人々が今、幸福をどのようなものとして捉えているのかを感じ取ることができるかもしれない³。

『アナと雪の女王』はディズニープリンセスのシリーズの最新作として受け入れられ、物語のダブルヒロインであるアナとエルサも姉妹そろってプリンセスの系譜に並ぶことが期待されている⁴。本稿では『アナと雪の女王』における幸福を、これまでのディズニープリンセス映画との比較、エルサとアナの対比、エルサと彼女が帰属する社会との関係の推移に着目しながら読み解いていく。

1937年、アメリカ合衆国でディズニー長編アニメーション映画第一作として『白雪姫』(*Snow White and the Seven Dwarfs*)が公開された。白雪姫は、素敵な王子様が自分を見つけお城に連れて行ってくれることをひたすら切望するプリンセス（願いが叶うと言われれば怪しいリングでも口にする）として描かれている。その後続く『シンデレラ』(*Cinderella*, 1950)、『眠れる森の美女』(原題：*Sleeping Beauty*, 1959)、『リトル・マーメイド』(*Little Mermaid*, 1989)、『美女と野獣』(*Beauty and the Beast*, 1991)などのディズニープリンセス作品でも、プリンセスは可憐で美しく、困ったときにはいつもかわいらしい動物や優しい人々、そして頼もしい「王子」が助けてくれる⁵。時代を問わず安定しているディズニープリンセス関連の商品展開の好調からもわかるように、プリンセスは女の子が憧れるものの一つであると言えるが、その一方で、自分を幸せ

にしてくれる王子を待つというプリンセス像は、女性の生き方や幸福について単純でナイーブなイメージを与え、そして批判の対象にもなってきた⁵。出会いから恋愛成就までのプロセス、プリンセスの性格や人種、彼女たちが活躍する舞台、その前に立ちはだかる障害などは変化しているが、ほとんどの作品で、「王子」との結婚がハッピーエンドの必須要素となっている。『ポカホンタス』(Pocahontas, 1995) と『メリダとおそろしの森』(Brave, 2012) は、恋人との結婚が描かれない例外である。とはいえ、ジョン＝スミスと別れて生きるというポカホンタスの最後の選択はハッピーエンドのイメージからはほど遠い現実の苦味が感じられ、結局のところ結婚が幸福の象徴であることを暗に示している。『メリダとおそろしの森』は恋愛要素が一切ないが、そもそもこの作品はディズニーの子会社ピクサーが製作にかかわっているため、ディズニープリンセス作品の系譜からは外れていると言える。

さて、最新のディズニープリンセス作品である『アナと雪の女王』は、従来のディズニープリンセス作品の伝統を引き継ぎながらも、エルサとアナの姉妹をダブルヒロインに据え、男性に頼らずに活躍する姿を描き、またヴィランズ(悪役)との対立を抑えるなど新しい要素も備えている。ユーモアがあるのは、随所に自らも属するカテゴリーであるディズニープリンセス映画に対するパロディが散りばめられている点だ。エルサの戴冠式に際して初めてパーティーに出席することとなったアナが「運命の人に会えるかも」とはしゃいでいる様子や、会ったその日にハンス王子との結婚を決める世間知らず具合には過去のナイーブなプリンセスたちへの自己批判が読み取れる。ハンス王子もまた、いわゆる「ヒロインを助け、お城に連れて行ってくれる白馬の王子」ではない。

幸福の観点で留意すべき点は、物語においてヒロインの幸福を脅かす要素が外的なものではなくヒロインであるエルサ自身の魔力である

ということである。これまでのディズニープリンセス映画では、ヒロインは物語の初期段階において高貴な生まれや身分にそぐわない不遇に陥るパターンが多く描かれてきた⁶。幸福から不幸への落差や、外的な力によって理不尽な目に遭うという状況が観客の自己移入を引き起こすきっかけとなる。それゆえ観客は、ヒロインが美貌と気立てを備え、小さな生き物たちに愛され、時には魔法による助けを得ることができても、嫉妬を覚えるのではなく、応援する気持ちを抱くことができる。また、王子との結婚は、苦勞を耐え忍んだヒロインが勝ち得るのにふさわしい報いとして祝福される。対して『アナと雪の女王』の場合、不幸はエルサの生まれ持つ魔力の暴発によってもたらされる。後でまた述べるが、幼少時に魔法でアナを傷つけてしまったことが不幸の始まりとなる。幸せな状況を崩す原因は内部にあるのだ。初期段階における観客の自己移入があるとすればそれはエルサのトラウマということになるだろう。そして、トラウマの克服とその難しさが物語の推進力となる。

幸福を阻むものが内的な問題であるならば、問題を乗り越えた先に行き着く幸福の形も内的なものである。物語はハッピーエンドを迎えるが、それは他のディズニープリンセス映画のように、外からやってきた異性の恋人との恋愛成就や結婚によるものではない。障害や妨げを乗り越えて男女が結ばれるという幸せが不在であるかというところではない(妹のアナは運命の恋を夢見ている)が、結婚は幸せのゴールとしては設定されていない。また、ハッピーエンドの鍵となるのは、ディズニープリンセス作品らしく、「真実の愛」ではあるが、それは男女間の愛ではなく姉妹愛である。エルサのトラウマの要因が妹アナをはじめとする他者を傷つけてしまうという恐れにあるのだから、その解決が妹アナを通して行われるのは物語の構造としては自然な流れかもしれない。アナとの軋轢、そして和解が象徴する幸福とはどんなものなのだろうか。物語内容をふまえた上で、大ヒットした

主題歌「Let it go ～ありのままで～」が流れる、エルサの自己解放のシーンに注目してみよう。

2. ありのままの自分

物語は中世ヨーロッパ風の街並みのアレンデル王国を舞台としている。王女エルサは触れたものを凍らせ、雪や氷を生み出す魔法の力を持っている。幼い妹アナと遊んでいたときに誤って魔法で傷つけてしまったことをきっかけに、魔法の力を隠すために城の一室に押し込められ、自らも魔法の力を忌み嫌うようになる。国王夫妻が船の難破で亡くなった後、成人し女王として戴冠式を迎えることになるが、その際、アナの軽はずみな言動に激昂した拍子に力を放ってしまい、臣下や国民の前にその恐ろしい力をさらけ出してしまう。ここで少し触れておきたいのが、本作品の物語世界における魔法の位置づけである。両親はエルサに魔力があることを知っており、エルサが幼い頃は自由に使わせていたことや、アナの頭に氷の魔法が当たってしまった際にトロールに助けを求めていることなどから、魔法の存在が妖精物語に出てくるような驚異として信じられている世界観であると言えるだろう。怒りゆえにエルサの力が放たれてしまったときに彼女が「魔女」と呼ばれ、化け物扱いされるシーンもあり、異常な力に対して科学的で合理的な説明や解釈がなされない中世的な世界とも言える。魔法が象徴するものは異端であり、社会になじむことのできない規格外の個性である。ともあれ、人々が自分の力に怯え、敵視するのを見て絶望したエルサは雪山へ向かう。

この場面で主題歌「Let it go ～ありのままで～」が流れ、エルサは歌いながらこれまで隠れて生きてきた苦しみを振り返り、これからは自由に生きていくことを決意し、魔法の力で氷の城を築きあげていく⁷。その姿は楽しそうで、自信に溢れている。雪の女王エルサが誕生する瞬間である。「ありのままの姿見せるのよ、ありのままの自分になるの」と日本語に訳された歌詞から

もわかるように、この歌からは自分らしく生きようという明るいメッセージを受け取ることができるし、エルサの力の解放や自己肯定もまた幸せになるための鍵、もしくは幸せな状態そのものにも見える。しかし、このシーンは、エルサが愛する妹や、統治責任を負うべき国民に背を向け、逃げ去るようにして半ば自暴自棄になって雪山に引きこもっていくシーンでもある。しかも、自分の心の動揺から魔法を制御できずに王国を凍らせて冬の中に閉じ込めてしまったのを放置したまま去ってしまうのだから、物語上、大きな問題が発生する場面である。このような問題を社会にもたらして、一人好きに生きるという態度は、モラル的に正しいとは言い難い幸福の形である。少なくともディズニーの製作者側が「よい幸福」として提示するものではないだろう。自分一人しかいない世界での自己肯定や、誰も見ていないところでの力の発揮は、独り善がりであるし、むなしい。エルサが「いい子」であろうとするのをやめ、好きな髪型をして好きな服を着て、存分に力を発揮している様子は、見ていて確かに爽快ではあるが、自分のためだけにありのままであろうとすること、自分のためだけの幸福は自己満足にすぎない。

さて、エルサが引き起こした「乗り越えるべき障害」である王国の危機を救うために、妹のアナは周囲の制止を振り切って雪山へ向かい、そこから物語の「冒険」の部分が始まる。氷の城にエルサを迎えに行くものの、エルサは頑なに「自分自身でいようとすると誰かを傷つけてしまうから自分は孤独でいいのだ」と言って心を閉ざす。このシーンでは一度のみ流れる「Let it go ～ありのままで～」とは違い、本編中変奏曲のように様々なシーンで使われる「生まれてはじめて」(For the first time in forever) が流れ、ポジティブで楽観的なアナとネガティブで悲観的なエルサのそれぞれの思いが二重唱となって、対比を際立たせる。戴冠式が始まる前にもこの曲が流れ、招待客や国民に早く会いたいと楽しみにしているアナと、人々の前に姿を現して秘

密が知られてしまうのを恐れるエルサの対比がすでに提示されている⁸。この対比があるからこそ、氷の城での再会シーンでは、アナをいたわりながらも、拒絶するエルサの苦悩、「他の人々と仲良く暮らすには自分を偽らねばならず、本当の自分であるためには一人ではない」という幸福を阻むジレンマが痛々しく感じられる。

幼い頃にエルサの魔法で頭に傷を負ったアナだが、この再会のときにも勢い余ったエルサの魔法のせいで胸を傷つけられてしまう。これが仇となって「真実の愛の行為」によってしか命が助からないという危機的状況に陥る。トロールの長老は国王夫妻が頭を傷つけられたアナを連れて来た際に「心でなくてよかった。心はそうたやすくは変えられない。でも頭なら説き伏せることができる」(You are lucky it wasn't her heart. The heart is not so easily changed. But the head can be persuaded.) と言うのだが、この伏線ともなっているセリフは、傷ついているのはアナではあるものの、間接的にエルサの状態を言い得ているようにも読み取れる。つまり、部屋に閉じこもり、力を隠し通していたときのエルサはまだ聞く耳を持っていたが、アレンデールを出て雪山の氷の城に閉じこもったエルサはもはや誰の手にも負えず、心が凍ってしまっているということだ。となると、本当に溶かすべき氷の心はアナではなくエルサの心となる⁹。映画は水職人たちが暗い中、氷を切り出すシーンから始まり、このときに男たちが歌う曲の題名は「氷の心」(Frozen heart)で、「正しくも悪くもある氷の力は凍った心を持っている。その凍った心を掘り出そうじゃないか」(This icy force both foul and fair has a frozen heart worth mining)と歌う。この歌詞ですでに物語の方向性が示されているとも言える¹⁰。

ここで、もう一人のヒロインであるアナに注目してみよう。彼女は、思い詰めやすい性格で苦悩する姉とは対照的に、素敵な王子様との出会いを夢見る、天真爛漫でまさに「ありのまま

に」生きているような女の子である。エルサがありのままに生きたら、世界が凍ってしまうのに対して、アナはチョコレートを食べたいだとかダンスをしたいだとか他愛のない欲望ばかりだから害がない。誰も寄せ付けないエルサと正反対で、作中ではハンス王子と山男のクリストフの二人の男性と恋仲になる。真実の愛の行為としてのキスを求め、クリストフや雪だるまのオラフの力を借りて、雪山からハンス王子のもとに駆け付けるが、ハンス王子に裏切られる¹¹。ようやくクリストフの愛に気付き、そのキスを受けることができるという状況になるが、ふと周囲を見渡すと無防備のエルサに剣を振り下ろそうとするハンス王子の姿が目に入る。アナは自分の命よりもエルサを救うことを選ぶ。このアナの自己犠牲が「真実の愛の行為」となってアナ自身を救い、エルサを変え、王国の冬を終わらせることになる。自分の体も心も凍りつくのを承知でエルサの方へ駆けつけたアナが、エルサの氷の心を溶かすのだ。

アナはいわゆるディズニープリンセスのように純粋で明るい性格のため、恵まれたプリンセスのイメージが強い。しかし、その精神的な強さや、利他的な行動は超人的である。アナがなぜ皆に愛されるプリンセスであるかと言うと、それは彼女が常に自分のためではなく他人のために行動するからである。オラフが言うようにアナは真実の愛を知らないのかもしれないが、知らずして実行しているような部分がある。

ここでふたたび「ありのまま」というキーワードを持ち出すと、アナの「ありのまま」が自分のことを顧みない「ありのまま」、つまり自分のあるべき姿などすっかり忘れて他者に尽くす「ありのまま」であるのに対し、エルサの「ありのまま」は自意識の強すぎる「ありのまま」であることがわかる。なぜならそれは他者をすべて排除した世界でのみ実現できる状態であるからだ。エルサが最後、「そうよ、愛よ！」と言って氷を溶かし、人々にとって善となるよう魔法を使いこなせるようになる結末を見ると、他者へ

の愛ゆえにありのままの自分であるアナの生き方が、幸福の教えとして提示されていると言えるだろう。魔法を使うエルサは、自己肯定をし、自分の力を解放しているが、それは自分のためではなく他人のためであり、そこには自己満足ではない、充足した幸福がある。

3. 自己解放する個人と社会

『アナと雪の女王』でディズニーキャラクターとしておもしろいのは、圧倒的に強いアナよりも人間らしい弱さも持ったエルサの人物像であり、幸福についても、最初から生き方に関する問題意識を持たないアナの幸福よりも、社会との不和に悩むエルサの幸福の方が興味深い。社会から追放されるエルサが再び社会に迎え入れられるまでを振り返ってみよう。

エルサは城の一室に閉じ込められる前の幼少時をのぞいて、幸福な時間を知らない。妹のアナを魔法で傷つけてしまうのが、社会との最初の衝突である。「自分自身でいようとする誰かを傷つけてしまう」、つまり自分を社会と対立させてしまう力を持っていることに気付く。その後、エルサは王国の城の中で育つが、妹との接触は許されず、魔法の力を使うことも禁じられる。王国の人々に自分の力のことを知られることなく、ひっそりと隠れるように生きることは、社会の内部にいながらも疎外された状況で生きることである。その内的に疎外された不幸な状況が、戴冠式での力の暴走後、周知の事実として見かけ上も明らかになる。エルサは追われるようにして雪山へ赴く¹²。

社会に対して隠していた力が露見し、エルサは怪物のように恐れられ、孤立する。社会の内部でも外部でも不幸なエルサだが、社会の側から見れば、これは自然な現象であると言える。整合性をもつ集団として、伝統や慣習を重視する以上、他と違って存在、集団になじまない異分子であるエルサは排除すべき対象となる。しかし、そうは言ってもエルサもアレンデール王国という社会の構成要素であり、しかも女王

なのだから欠くことのできない要素である。エルサの魔法で凍りつき、雪の降り積もるアレンデール王国は、エルサという個人を失って機能不全になっている社会の象徴である。苦しむのは、孤立したエルサだけではない。社会もまた異常な「寒さ」に苦しむ。個人なくして社会は成り立たない。

エルサが社会に戻り、社会がエルサを取り戻すための解決策は、先ほども見たようにアナの「真実の愛の行為」である。アナは社会の中の個人であり、そのアナが社会の外に出たエルサの犠牲になることで、エルサの疎外感が解消する。社会の方も「寒さ」という試練と痛みを経て、ようやくありのままのエルサ、つまり「違い」を受け入れる準備が整う。エルサは、自分が孤立していないことを知り、他人のために行動することを知る。自分を違った存在にしていた力は、もはや自分を社会から追放し、切り離してしまうものではない。その同じ力が自分の中で生きさせる恩恵となるのだ。『アナと雪の女王』では、エルサの生き方を通して、社会における個人の自己実現が幸福として描かれていると言える¹³。これは何もエルサという魔法の力をもったプリンセスに限った話ではない。どのような個人も、各々を他のものと違ったものにする特別な性質をもっている。その個性は、他の人のために使われるべきものだというメッセージが『アナと雪の女王』から読み取れる。

最後に、エルサがもともとヴィラン（悪役）として想定されていたことに触れたい。これまでのディズニー作品の展開であれば、エルサが王国を追われ雪山に入り、自己解放するシーンは、良心を捨て自分の欲望の虜となり、冷たい雪の女王という名の怪物に化す契機として描かれていただろう。おそらくもともとはこのような流れを考えていたのだろう。エルサを悪役とする方向性が変わったのは、主題歌「Let it go～ありのまま～」が作られた後であるようだ¹⁴。

さて、ヴィランズとはどんな存在か。彼らは自分たちの欲望に従い、ありのままに生きてい

る。自分たちの力や個性を自分たちの利益のためだけに行使し、社会の脅威となる。彼らが自分たちのためだけに行動する限り、社会に組み込むことはできない。当初ヴィランとしてデザインされながらも、エルサはヴィランにならず、最終的に王国の女王として幸福になる。このエルサというプリンセス像から見えてくるのは、どのような個人にも、自分の個性ゆえに悩み、他者に対する不安や恐れからヴィランと化す危険もあれば、自分に向けて差し出された手を握り返し、社会の中で幸福に生きる道もあるということだ。トロールの長老は幼いエルサにこう忠告していた。「Fear is your enemy」、敵は自分自身の中にある恐れだ。

注

1. <http://jp.wsj.com/articles/SB10001424052970204431804580115400829786686>, 2014年9月24日閲覧。日本での公開は2014年3月で、主題歌「Let it go ～ありのまま～」とともに大きな話題となり、ファンの熱狂ぶりにも注目が集まったのが記憶に新しい。映画館で鑑賞しながら挿入歌を合唱するという合唱上映は、日本の映画館にも登場した。
2. 東京の丸の内では、「Disney Timeless Story ～ここから始まる、終わらない物語～」と題されたイルミネーションにおいて『アナと雪の女王』の世界を再現したステージが設置され、ファッションビルルミネも新宿、横浜、有楽町で、映画をテーマにしたイルミネーションとキャンペーンを行った。
3. 本稿の考察の一部は、シンポジウムと別に学内で開催した『アナと雪の女王』の上映会にて参加者と行ったディスカッションの内容に着想を得ている。ここで貴重な意見を出してくださった参加者の助力に感謝の意を表したい。
4. 公式にディズニープリンセスに認定され、商品展開がされているのは11名で以下の通りとなっている：白雪姫、シンデレラ、オーロラ（『眠れる森の美女』）、アリエル（『リトル・マーメイド』）、ベル（『美女と野獣』）、ジャスミン（『アラジン』）、ポカホンタス、ムーラン、ティアナ（『プリンセスと魔法のキス』）、ラプンツェル（『塔の上のラプンツェル』）、メリダ（『メリダとおそろしの森』）。もともと王家の生まれの「プリンセス」もいれば、王子などと結婚することで「プリンセス」となるヒロインもいる。ムーラン、ポカホンタス、メリダのようにそのどちらにもあてはまらない「プリンセス」も存在し、「プリンセス」とは人々に愛される素敵な女の子・女性を指す名称であるとも言える。『アナと雪の女王』のアナとエルサはまだ登録されていないようだが、一般的にすでに「プリンセス」として広く認知されている。（URL: <http://www.disneystore.com/disney-princess/mn/1000016/>, 2014年9月24日閲覧）
5. 若桑みどり『お姫様とジェンダー』筑摩書房、2003参照。
6. 安定していた状態に、何らかの災いや不幸が起きることで物語が動き始めるという点ではプロップがロシアの魔法昔話を対象に抽出した物語のパターンと同じである。
7. この主題歌は本国アメリカ合衆国でもアカデミー賞歌曲賞を受賞し、高い評価を受けた。主題歌は映画が公開された各国の言語に訳され、各国の歌手によって歌われ、その比較も動画サイトなどで話題になった。日本でも、2014年度の就活応援ソングの2位につけるなど人気が高い。（URL: <http://sankei.jp.msn.com/entertainments/news/140812/ent14081216580008-n1.htm>, 2014年9月24日閲覧）
8. エルサの秘密を隠さねばならないという不安や恐れは戴冠式の際に手袋をはずすシーンでも表現されている。手袋はエルサの押し殺された自己の象徴である。右手の手袋はパーティーでアナに手をつかまれたとき

- に脱げてしまったせいで、意図せず魔法が出てしまう。左手の手袋は雪山で「Let it go～ありのまま～」が流れるシーンで、「隠していたけれど今は知られてしまった」と歌いながら上に放り投げる。
9. アンデルセンの原作の童話『雪の女王』では、悪魔がばらまいた鏡の破片が少年カイの目と胸に刺さり、カイは乱暴な性格になってしまう。その後、雪の女王によって連れ去られ、接吻によって心臓が凍ってしまった少年カイを友達の少女ゲルダが救いにやってくる。ゲルダがカイを抱きしめたときに流した熱い涙がカイの胸にしみわたることで氷の心臓が溶けて鏡の破片もなくなり、ゲルダの歌を聞いてカイが泣き出したことによって目からも破片が流れ落ちる。
 10. この曲の中でも「let it go」という言葉が、「それいけ」というような意味で使われている。
 11. この王子は13人兄弟の末っ子で王位継承順位が最低で、それゆえに他の国を乗っ取ることを考えているという設定である。王子がヴィランであるという設定は、ディズニーの王子像を塗り替えたと言える。
 12. エルサの疎外は、扉の開閉シーンでも象徴的に表現されている。扉を開けようとするアナと閉ざそうとするエルサの対比がここでも効果的に使われている、またエルサの眼をぎゅっと閉じて感情を押し殺そうとする表情が印象的に描かれているため、臉の開閉にも同じ方向の読み取りができるかもしれない。序盤に幼いアナがまだ寝ているエルサを起こして遊ぼうと誘うシーンでも、エルサの閉じた臉をぐいっと上に持ち上げて開かせるのはアナである。
 13. 個人が社会の中でこそ自分の力を最大限に発揮し、その力をもって社会に貢献し、精神的な充足を得るという生き方自体は新しいものではない。しかし、ディズニープリンセスの幸福が結婚ではなく、社会の中で活躍すること、つまり働くこととして描かれるのは、『白雪姫』の幸福からの道のりを考えると感慨深いものがある。
14. URL : <http://headlines.yahoo.co.jp/hl?a=20140424-00000008-wordleaf-movi>, 2014年9月24日閲覧。